

19 褥瘡形成を繰り返す脊髄損傷患者の家族の思い ― 家族間への介入を考える ―

病院看護部 2階病棟 藤枝徳子 篠崎菜穂子 加藤かほり

【はじめに】A 病院では、脊髄損傷患者および家族に対し入院中より褥瘡予防の指導を行っているが、退院後、褥瘡を形成し入院治療を要する患者は少なくない。本研究では、褥瘡治療のための入退院を繰り返して社会的役割を失った事例を通し、家族が褥瘡に対し、患者に対し、あるいは自分に対し、どのような思いを抱いているのかを知りたいと考えた。先行研究では、褥瘡形成を繰り返す脊髄損傷者の日常生活や褥瘡予防に関する研究は多いが、家族の思いに視点を当てたものはなかった。

【方法】研究参加者について：A 氏は 55 歳で、夫は平成 9 年（当時 45 歳）に脊髄損傷となる。平成 21 年初めて褥瘡を形成し以後、1 年間で 4 回の入退院を繰り返した。職業は小学校校長である。データ収集方法：研究参加者に対し半構成的面接を行い、脊髄損傷者である夫が褥瘡を繰り返し形成した時の家族としての体験について語ってもらった。その際、研究参加者の承諾を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。分析方法：逐語記録は文脈ごとに思いの抽象度を高め、テーマをつけて帰納的に分析した。なお分析した内容は、共同研究者間で繰り返し検討を行うことで妥当性を確保した。倫理的配慮：A 病院倫理審査委員会の承認を得た。対象へは研究主旨、方法、自由意志での参加、個人が特定されないこと、研究終了後にデータは全て破棄することを説明し文書で同意を得た。

【結果】A 氏の語りは文脈に沿って 6 つのテーマとして記述できた。1. 褥瘡を繰り返すことに家族として責任を感じ、夫婦の関係性を見直す必要があったかもしれないと後悔していた。2. 退院間もない時期に褥瘡から出血し、仕事の都合で退院した夫に従ったことは適切であったのか、わからなくなってしまった。3. 医師が説明する『治った』ということが、褥瘡ができる前の生活に戻れることだと思っていたが、そうではなかった。4. 夫が長期におよぶ入退院を繰り返したことで、また褥瘡ができるのではないかと常に不安を拭い切れなかった。5. 褥瘡の繰り返しにより生活の幅が狭まり、夫に褥瘡ができる前の生活に戻りたいという儂い期待を持っていた。6. 褥瘡の繰り返しにより生活が一変してしまい、気持ちの落ち込みを感じていた。これらから、①ケアする立場としてこれまでの夫婦の形を見直す必要、②妻としての責任、③医師から説明を受けたことと解釈したことのずれ、④繰り返す褥瘡への不安、⑤気持ちの落ち込みと希望という要素が抽出できた。

【考察】A 氏は夫に自分の思いを伝えられなかった。看護師は妻の思いを受け止め夫に伝えるという第三者としての役割を担い、夫婦の意思疎通を助け相互理解を促進させることが重要ではないかと考えられた。また、A 氏は夫の繰り返す褥瘡形成と入退院という問題を解決したいと行動に変化が現れていた。家族は自ら問題解決する能力を持ち合わせており、家族に起こる変化にも注目する必要があったといえる。看護師が、妻の思いを夫に伝えるという直接的な介入も重要ではあるが、家族間の長年の信頼関係を尊重して関わるためには、直接的に介入するだけでなく、家族が自ら問題に気付き解決行動をとることができるよう、意図的かつ間接的に介入することが重要である。そのために、看護師は患者や家族とコミュニケーションを積極的にはかり、家族の抱えている苦悩や困難な状況を把握することが必要である。そして、それらをもとに家族と今後の生活について話し合い、家族が視野を広げ、自分たちの状況を認識し、理解し、行動に変化を起こすきっかけを見出すことができるような関わりが必要だと考えられた。